

4	〔俳諧短冊〕（ほととぎす）	近世	松井家旧蔵文書	P01013	No. 853-63
---	---------------	----	---------	--------	------------

女性俳人、柳旨（1712～1787年）の短冊です。

「ほととぎす まくらに科（とが）は なけれとも」

初夏の夜にホトトギスの初音を聞くことは風流なこととされ、また、長い間、日本人の楽しみの1つでした。この句は、待ち疲れてとうとう聞けなかった（寝てしまった）ことを、「まくら（枕）」という身近な物を用いて詠んでいます。

松井家旧蔵文書の俳諧関係資料には、上州の女性俳人の名も出てきますが、多くはありません。本短冊の柳旨は、天明3（1783）年の浅間山の大噴火について『文月浅間記』を書いて評判となった、高崎町の羽鳥一紅の姉ともいわれますが、詳細は不明です。ただ、一紅が父の菩提を弔うため、故郷の甘楽郡下仁田村を発ち、善光寺へ参詣した旅について書いた俳文紀行『久佐麻久良』（P1103 No. 462）に同行者として登場します。

本短冊の裏面に「上毛宮崎朔字母義」とあるように、柳旨は甘楽郡宮崎村（現・富岡市）の富永朔宇の母親であり、如白の妻でした。富永家は、代々俳諧に親しんだ家ですが、なかでも柳旨は、加賀の千代女よりも上手になるでしょう、という渡辺雲裡坊からの書簡が伝わっています。雲裡坊は、松尾芭蕉の幻住庵を再興した俳人です（玉城司著『上州 富永家の俳諧』信毎書籍出版センター）。

本短冊が松井家に伝わった経緯は不明ですが、松井素輪が天明8（1788）年に俳諧関係で高崎町を訪れ、一紅と同席したことは素輪の俳諧日記に記されています（No. 811 複製本 PF1902 でも閲覧可能、文書番号 60/811）。

